隱逸

――東晋時代――

村上嘉実

【要約】隱逸は一種の逃避であるが、逃避の性格は時代によつて異る。古くは権力から遠ざかつて山谷江海のほとりに逃れ、自ら労働して耐乏的な生活に甘んずるのが常であつた。西晋時代まではなおそのような古来の風が強く存していた。東晋時代になると、自己の田園の中に坐ながらにして隱れ、裕かにして楽しむべき隱逸となり、一見逃避性が薄らいだように見える。しかしこれは貴族社会が固定することによつて可能となつたので、却つてより深い逃避に入つたものと見るべきであろう。又隱逸の理念ともいうべき老荘思想から云えば、万物の根本としての道が明らかになり、それを求める隱逸人は世の優越者として高い誇りを有することが、一般に認められるようになつた。そして隱逸は単に高踏的なものではなく、同時に庶民的な面をも有していることが、東晋の貴族的隱逸の中にも見られる。なお西晋より東晋に移る過渡的なものとして、葛洪の隱逸を挙げておいた。

隱逸は一種の逃避である。それが如何なる形で逃避するかは、時代によつて異る。『後漢書』以後各正史には『逸民伝』が設けられているが、それ以前の文献に徵しても逸民は常に存し、隱逸が中国の歴史に大きな役割を有していることが知られる。逸民が常に存することは、隱逸という逃避なくしては中国の社会が成立しないことを意味するものであつて、この点から云えば中国には隱逸史というものが成り立つであろう。この小論においては東晋時代を扱うのが目的であり、隱逸の起源等について述べる暇がないが、比較の都合上、すぐ前の西晋時代について一瞥する必

要がある。

一　西晋時代

『晋書』隠逸伝の中で、西晋より東晋初期にわたる隠逸人としては、孫登・董京・夏統・朱沖・范粲・魯勝・董養・霍原・郭琦・伍朝・魯褒・任旭・郭文等があり、その他五胡十六国の治下から出た人も挙げられている。これらの人々はその動機が乱世の故に隠逸したことが強調されており、同時に著しく非社会的にして耐乏的であることが注目される。

先づ孫登については、その身分や出自は明かでないが、竹林七賢の阮籍や嵇康が訪ねて行つたことで有名になつた。彼は汲郡（河南）の山に隠れて土窟して住み、世人とは殆んど交渉をもたなかつた。嵇康は三年彼に師事したが、黙して言わず、ただ嵇康が去るに臨んで始めて口を開き、乱世に処する道を教えた。嵇康はそれを用いることが出来ないで死刑に処せられたが、獄中にありて後悔したことが『幽憤詩』の中に見える。孫登の態度については「魏晋の間は去就に嫌疑を生じ易く、貴賤何れも没落する者が多かつたので、孫統は黙したのである。」（『世説新語』棲逸篇注引、王隠『晋書』）といわれている。次に董京も出自は未詳で、初め隴西（甘粛）の計吏となつて洛陽に出で、市に乞うて衣食を得ていた。孫楚（後述）から出仕をすすめられ、それを辞する為に作つた詩は、道の衰えた現今にありては、ただ器を蔵して身を守るべきことを、老荘の口吻で述べている。次に范粲は陳留（河南）の人で、漢の萊蕪（山東）の長范丹の孫である。彼は魏に仕えて武威太守となつたが、魏を奪わんとする司馬氏の陰謀が露骨となるにつれ、偽り狂して言語を止め、車の中に寝て黙したまま三十六年を経、ついにその車中に終つた。次に魯勝は代（山西）の人で、父祖については記されていない。彼は八王乱の前に建康令となつたが、或年の元日天の気を望んで将来多故なることを知り、疾と称して官を去つた。その著述は世に認められていたが、乱に遭つて失われた。次に董養は陳留の人で父祖は未詳である。西晋の楊后が廃され時（これが八王乱の一因となる）、太学の堂に上つて「天人の理既に滅し、大乱起らんとす」と歎じ、永嘉年中に都の洛陽が北族に狙われている時、謝鯤や阮孚（何れも当時の

名族）に向つて機を知ることの要を説き、自らは妻と共に家具を担つて蜀に入り、終る所を知らなかつた。次に霍原は燕（河北）の人で父祖は未詳である。学問によつて門徒数百あり、隠逸の中から寒素を以て郷品の二品に挙げられたが、その後八王乱の起る時、賢良を以て徴されても行かず、更に王浚の乱に遭つて斬られた。次に郭琦は太原（山西）の人で、父祖は未詳である。彼は一旦西晋武帝に用いられたが、趙王倫（八王の一人）が位を簒つて用いようとした時、これを辞して家に帰り、終身仕えなかつた。次に伍朝は武陵（湖南）の人で、父祖は未詳である。西晋の喪乱の折、白衣にして零陵太守にすすめられたが、それに就かず家に終つた。次に魯褒は南陽（河南）の人で、父祖は未詳である。彼は貧素を以て自立し、八王乱により綱紀大いに壊れし時に当り、姓名を隠して『錢神論』を著わした。『錢神論』は、官位や名声をはじめ社会万般のことが、ただ錢によつてのみ決する世相を、痛烈に諷刺したものである。

次に任旭は臨海（浙江）の人で、父の訪は呉の南海太守であつた。彼は恵帝から徴されたが、朝廷の複雑な兆を見て行かず、やがて天下大乱し、更に陳敏の乱が起つて、賀循（呉の名族）と共に郷里を衛つた。次に郭文は河内（河南）の人で、身分が明かでない。彼は呉興（浙江）の大辟山中に入り鳥獣と共に暮したことが、晋書にくわしく伝えられている。葛洪（後述）も彼を訪ねたことがあり、又後に建康（東晋の都）につれ出されて、宰相王導や温嶠等と問答したこともあるが、彼がこの生活に入つた動機は永嘉の乱に洛陽が陥りし時にあり、「もと道を学ばんと欲して行きしも、思わず世乱に遭い、帰るに路なく」、遂に山中に入つた為である。なお夏統と朱沖とは、その隠逸した動機が明かでないが、夏統は会稽（浙江）の人で父祖は未詳、孤貧にして常に棕椶を採りて食を求め、朱沖は南海（甘粛）の人で父祖は未詳、自ら耕作して山野の生活をした。

更に『晋書』隠逸伝には、五胡十六国治下に隠逸した人々が相当に多く挙げられている。① その中西晋に関係あるものとしては、辛謐や范腾等がある。辛謐は隴西（甘粛）の人で、父の怡は幽州刺史となり、世々冠族（一族の中から屢〻顕官を出している豪族）であつた。彼は永嘉の乱に洛陽が陥る時、兼散騎常侍として関中の鎮撫に当つたが、長

安が陥るや身を退き、劉聡・石勒・石虎の世をへて一切の辟命を絶ち、喪乱の中に処して高邁の気を示した。彼が冉閔の徴を辞する時の書は、老荘思想を示したものとして興味がある。次に敦煌から出た氾騰は、父祖については記されていない。彼は一旦孝廉に挙げられて郎中に除せられたが、西晋末の兵乱によつて官を辞して帰り、張軌（前涼国の祖）から徴されても行かず、家財五十万を散じて隠れた。

さて以上掲げた人々は、『晋書』隠逸伝により、主として西晋時代に中原に出たものについて記した。彼等は乱世に遭いしを動機に隠逸し、或は黙し或は狂して没社会的な生活に入つた人が多い。彼等の中には出自未詳の人もあり、或は冠族出身の人もあるが、権力に屈しない隠逸者の生活が耐乏的であつたことは、断片的な記事によつても充分に首肯される。ただしかし右の『隠逸伝』の記事によつて、西晋時代の隠逸が凡て耐乏的であつたと断定することは、差しひかえなければならぬ。若し『隠逸伝』以外に例をとるならば、例えば張翰が秋風を聞いて、人生適意を貴ぶといつて呉に帰りし如く（『世説新語』識鑑篇）、自己の情性や意志に適うことを以て第一義とする隠逸もある。張翰は呉の名族であり（『晋書』文苑伝）、魏晋の隠逸が豪族社会を背景として行われたことを思うとき、東晋において顕著になる自適主義の隠逸が、西晋時代にもあつて然るべきである。しかし張翰の場合でも、やはり乱世から逃れるということが大きな動機となつており（『世説』識鑑篇注引『文士伝』）、その点が当時においては一般的であつたと思われる。既にして官界を逃れたる以上、『隠逸伝』に見られる如く、非社会的にして耐乏的な傾向を伴い易いのが普通であり、それは中国における隠逸の伝統から来ているものと見てよい。[2]

この意味で西晋時代の隠逸には未だ伝統的な面が強く残つていたのであるが、東晋時代になると、その逃避性にも耐乏主義にも変調を来すようになるのである。

二　葛洪の隠逸

西晋時代より東晋時代に移る前に、その過渡的な存在として、葛洪の隠逸について述べたいと思う。葛洪は『抱朴子』内篇において神仙の道を説いたが、その外篇においては現実的な問題、即ち君主政治と、社会及び文明の発達と

について述べ（拙著『中国の仙人』、及び拙稿『葛洪の世界観』文化史学第十一〔未刊〕、参照）、且つ隠逸者としての彼が、国家社会と如何なる関係の下にあるかを説いている。

葛洪の家は句容県（南京の近く）の冠族であり、自らも石冰の乱に戦功を立て、爵関中侯を賜わり、句容の邑二百戸を食んだ。しかし西晋末より東晋にかけては、喪乱の為に地位も財産も安定せず、彼が青年時代に貧の為に苦学したことが述べられている。且つ隠逸者として退譲を守る彼は「その食する所旬日の貯あらば、分けて人の乏しきを済う」（自序）という生活をなし、彼にとつて大切な仙薬の実験費にも事欠く有様であつた。

葛洪によれば、隠逸者は社会から認められないという悪条件の下にあつて、自ら耕作して生活すべきものとしている。耕作に当つても、豊沃な土地は人に譲り、自らは塩気のある瘦地を選んで取り（嘉遯篇――『抱朴子』外篇、以下何れも外篇による）、衣と食とは自ら作るべきものとしている（逸民篇）。その上隠逸者は鋭意芸文に没頭しているので、収穫はいよいよ少く、常に飢色が顔に現われている（守塡篇）。このように葛洪が、瘦地を選ぶことを説くのは、退譲の精神に出づるものである。物に随順して退譲することが道であるとなすのは、老荘思想から来ている。隠逸することそれ自身が、社会の競争において退譲することを示すものである。退譲を守る隠逸者は、貧に安んじなければならぬ。即ち『安貧篇』がある所以であり、真の富貴とは、六芸が備わり典籍を身につけて、文章が立派に書け徳音が無窮であることだとしている。又『嘉遯篇』や『逸民篇』にも、禄位は責任を重くして精神を労するものであり、むしろ躬耕して井を穿つて飲むとも、弾琴詠詩して娯しみ、自然に任じて自由を得ることが貴いとしている。右の叙述の中に、隠逸者が貧の中にありながら、自適して娯しむことを言つていることは注意する必要がある。

葛洪によれば、隠逸は道の大本を探求することであるから、迹の残るような逃れ方はよくない。静かにして無為と一にならなければならぬ（知止篇）。その意味において葛洪は後漢末の郭太（『後漢書』九八に見ゆ）を批判し、郭太は山林に居て而も独往することが出来ず、隠逸しながら東奔西走し、貴門に交わつて名の為に動き、口では静退を称えながら心では栄利を希う。彼の如きは避乱の徒であつて、全

隠の高者ではないとしている（正郭篇）。隠逸人は須らく高い心境をもたなければならぬ。「支体を曲げ、俯仰して我の喜ばざる者に会釈し、俗人に愛されないことを恐れ、我が身の貶されることを憂うる」如きは、隠逸人の最も忌む所である（逸民篇）。隠逸人の高さは、凡俗の知る所ではなく、葛洪はそれを喩うるに大鵬とミソサザイを以てする（荘子の思想に拠る――守瑞篇）。

隠逸者が高い境地にあるとしても、それは社会全体の上からエゴイズムになりはしないかという質問に対し、葛洪は隠逸者の特殊の任務について語る。即ち隠逸者は禄利を離れているが故に、真に道を追求する学問に従うことを得、徳を磨き、教育をなし、且つ後世に遺す著述を完成するのである（逸民篇）。このことは前漢武帝以来、官学が御用学問になつたこと、及び古来中国の著述で最もすぐれたものは、多く隠逸人の手によつて成りしことを思うとき、首肯されるものがある。要するに、隠逸者の任務は、「無用の用」（荘子の思想）にあると見ている。次に隠逸者が多く出るようになれば国家の機構が破壊されはしないかという問に対しては、隠逸者の数が常に少数に限られていることを以てする。退譲を守ることは困難なことであり、既にその数が極めて少いのに、あまつさえこの孤立無援の隠逸者を迫害しようとするものがある。それは隠逸者が、常に正しきを守つて世を厳しく批判するからである。世は勢利に競うを以て弊することはあるが、貧賤に安んずるものの多きに苦しむことはない（逸民篇）としている。

隠逸者がこのような悪条件の下にあることにつき、葛洪はそれを宿命に帰している。葛洪に従えば、世人は真に珍とすべきものを貴ばず、窮困の中に守道者が居ることを知らない（窮達篇）。それ故自己の才能を蔵して時を俟つものは、功を身後に望む外はない（時難篇）。時を悟ることは、命を知ることである。出仕と退処とは時の運によるものであつて、巣父（堯から天下を譲られても受けなかつたと伝えられる）の如く頑なになる必要はない。則ち時窮すれば退き、達すれば出でて仕えるのである。士たるものは貴行をなし得ても、必ずしもそれを世人に貴ばしめることは出来ない。才能を有していても、必ずしもそれを世人に用いしめることは出来ない。それゆえ人が己れを知らないのは、己れの罪ではない。隠逸者は陋巷に飢えていても、操は高

尚である。偉大な賢者は世事に拙であるから、これを知る人が少いのは当然であつて、それを宿命として諦観しているから悶えることなく、怨むこともない（任命篇）。隠逸の達人がかかる高尚の心を持していることを知らず、徒らに悲運を歎いていると考えるならば、それは井の蛙が大海を知らないようなものである（窮達篇）と。

右のような葛洪の処世観は、主として老荘思想からきている。もともと老荘思想は、権力の支配から逃れた隠逸者の思想として発展し、処世の態度を通して、宇宙人生の根本としての道に到達した。しかるに魏晋時代に流行した老荘思想は、既に道（無）が明らかにされている以上、これを求めることが人生において最重要のことであり（魏の何晏・王弼より西晋の王衍に至つてかかる考が唱道された）、従つてそれを求めることに優越感を抱くようになつた。魏晋の老荘思想が、世の劣敗者によつてではなく、豪族という特権階級によつて支持された所以である。

それと共に、葛洪の隠逸が、老荘を思想的根拠とする仙道の求道者としてあることを併せ考えなければならぬ。『抱朴子』外篇は世俗の現実世界を論じているのであるけれども、内外篇を通して彼の世界観より云えば、現実世界は超現実的なる神仙世界に連り、神仙世界こそ最高の世界であつた。故に隠逸者はただ現実世界の一隅に隠れているものではなく、神仙世界に至る第一の候補者として高い地位にあり、特殊な天分を禀けた賢者が、自ら好んでこの生活に入るべきものである。隠逸者が貧困であるということは、世の劣敗者としてあるが為ではなく、自ら退譲の精神により崇高な道を求めているが為である。帝王以下の為政者は、彼等の生活を保護し、その学徳に敬意を払うべきものであるのに、世は顚倒し、明識の人なく、この俗界の権力を最高のものと考えているが故に、隠逸者の真価を知らないのである。かくて葛洪は時命を説き、敢えて耐乏の生活に安んじようとする。そこには古い逸民の伝統が、彼においても強く作用している。しかしながら彼の求める仙道の本質は、決して禁欲的なものではなく、むしろ欲望肯定的な生命主義であることを想起する時、貧困の中にも極めて明朗な意欲が動いていることを知るのである。又彼が、隠逸は一面において乱世から逃避することによつて起ることを認めると共に、本質的には、初めから道の優越性を信

じて自ら志向して隠逸すべきものであることを主張する所に、以下に述べる新しい東晋的な隠逸を示唆するものがある。かくて彼の隠逸の中に、西晋より東晋に移る過渡的なものを見るのである。

三　東晋の隠逸

既に見てきた如く、西晋の隠逸は乱世から逃れるということが大きな動機となつている。これは隠逸がもともと逃避的性格を有する所から来るものであるが、同じ逃避といつても、漢代のものとはやや趣きを異にしている。漢代には王莽の前後から逸民が多くなり、道の行われない朝廷（権力者）から逃れるという傾向をもつていた。このことは漢代以前の隠逸においてもほぼ同様で、例えば孔子が隠逸について語る所は、[13]やはり朝廷を中心に云われている。然るに魏・西晋時代に入ると国家権力の中心が弱体化し、豪族の勢力が角逐する所に浮動的な政治圏があつたので、隠逸者はただ一個の権力者から逃れるのではなく、かかる乱世そのものから逃れるという傾向をもつてきた。何れにしてもそれが逃避である以上、耐乏的な生活を伴うのが普通であつた。

ところが東晋時代になると、隠逸することが欠乏に堪えて身を苦しめるということではなく、裕かにして楽しむべきものとなる。それらの人々は、必ずしも権力者や乱世から逃れるというわけではなく、初めから志望して隠逸の生活に入るのである。それは一見逃避性が薄らいだように見えるけれども、実は門閥による貴族社会が固定してきた為に起つてきた現象であり、社会そのものが国家権力から逸脱してきた。貴族が官位と密接に結びついていることは、国家権力が貴族社会の中に分散していることに外ならないのであり、貴族社会は個々に封鎖された勢力圏を構成していた。即ち貴族の構成員は、生れながらにして社会的身分と経済力とを有し、官僚生活のみが人生の凡てではなくなつた。彼等は自らの個性に従つて、或は出仕し又は退処することも自由である。「出処同帰」という言葉は、この時代に至つて真に現実性をもつようになつてきた。且つ精神史の上からも、政治の占める位置が下つてきた。人生において最も意義あることは、政治よりもむしろ宗教・哲学や文学・芸術に専念することであり、それを満足さす為に、

明媚なる山水の中に自適する生活が選ばれる。殊に老荘思想が普及して、万物の本は「無」（自然）であることが明かになると、政治は益々俗物視され、高尚な隠逸の生活が貴ばれるようになつた。隠逸者の背後には広大な身分的連繋があり、万一生活に窮することがあつても何時にても援助を求めることが出来、又官位に就くことも可能であつた。あまつさえ隠逸者は高い名声を有していたから、孤独に陥ることはなかつたのである。かかる風は三国や西晋時代にも溯ることは出来るが、東晋時代になつて顕著になつてきたことである。尤も東晋時代の隠逸にはその外にも種々の形式があつたが、最も東晋的な特色のあるものは、右の如きものであつた。以下『晋書』隠逸伝、及び『世説新語』棲逸篇の中から、阮裕・孟陋・戴逵・謝敷・龔玄之・何準・陶淡について述べ、更に広く王羲之・謝安その他の人々について考えてみよう。

阮裕は阮籍（竹林七賢の一人）の族弟である。その兄は阮放で、この一族には曠達の風があり、何れも名士として過せられている。彼は嘗て大将軍王敦の主簿となつたことがあるが、王敦に不臣の心あるを知り、酒によつて職を廃し、為に罷免されて禍難をまぬがれることが出来た。ここには乱世から逃れるという動機が見られる。東晋初期は西晋末喪乱の余波を受けていたから、このような話は彼以外にも少くない。ただそれ以後の彼の態度の中にはじめて、東晋的な隠逸の特色が現われてくる。彼は遂に会稽の剡県に立てこもつて棲逸したが、同じく会稽に居た王羲之は、彼の態度が蕭然無事にして足るを知つて自得せる様を見て、「寵辱に驚かない」（『老子』第十三章の語）といつて讃歎した。当時謝安も亦会稽に棲逸しており、相並んで時人から高く評価されていたことは、『世説新語』の中に多く記されている。彼は度重なる朝廷の徴辟を辞して、中央の顕官には就かなかつたが、ただ臨海太守と東陽太守には就いたことがある。或人が、隠逸を志しながら何故二郡の太守になつたかと問うたのに対し、「自分が王命を辞したのは、敢えて高きを示す為ではない。自分は若い時から宦情がなく、世事については拙である。しかし自ら耕作して暮すほどの自信もないので、已むを得ず生活の資を得る為に太守に就いた。それはただ私計の為である。」と答えた。陶淵明が封沢の令に就いたのも、これとよく似た心境である。官

職が軽視されることは魏晋によく見られることであるが、それが隠逸の具にされることは東晋になつて顕著になり、これより後永く中国の宦情の中にも影響を与えるようになつた。

次に孟陋は呉の司空孟宗の曾孫に当る。彼は会稽王（後の簡文帝）から徴されても行かず、征西大将軍桓温が自ら訪うても出なかつた。これにより彼の名声は益々高くなつたといわれる。彼は武昌の陽新県に居て、学問文芸を娯しみ、虚位のままで通し、未だ嘗て都に出たことはなかつた。兄の孟嘉（陶淵明の母方の祖に当り、やはり超俗的な人であつた）は桓温の征西長史として盛名があつたが、彼の隠逸の名は決して兄に劣らなかつた。或時都の士人が孟陋を見ようと欲し、「兄の病篤し」と偽つて彼を呼出した。彼が始めて都に出ると、時の名士達は彼を見て歎賞し、「少孤（陋の字）かくの如くである以上、万年（兄の字）は当に死すべきである」といつた。これほどの声誉があれば、隠逸も亦楽しといわなければならない。

次に戴逵は会稽の剡県に棲逸していた。彼は広い意味の芸術家であり、書画・彫刻・音楽・文章・談論等、その他一切の巧芸に通じていた。④彼の祖父碩も、父の綏も、何れも名位あり、且つ彼には有力な郗超が後援者になつていた。郗超は桓温の参軍であつたが、家に莫大の財を有し、隠逸人を後援することを誇りとしていた。善く隠逸する人があると聞けば百万の資を投ずることが珍しくなく、剡にあつては戴逵の為に邸宅を起し、それがあまりに立派であつたので、逵が近親者に与えた手紙の中に、「官舎の如し」といつている。郗超は傅瓊の為にも百万の資を辦じようとしたが、傅瓊の隠事が齟齬したので実現しなかつた。

彼は隠逸しても「多く高門風流の者と遊び、談者はその通隠を許す。徴命を辞して高尚の称を著わす」（『世説』雅量篇）、「貴姓と交遊して著名なり」（棲逸篇）といわれた。彼は令名ありし為孝武帝より徴され、固辞してもなお郡県より喧しく逼られたので、遂に呉に逃れ、呉国内史王珣（郗超と共に桓温の股肱となりし人）の別館に潜み、後に許されてから剡に還つた。彼の兄の逵（リョク）は武功ありて広陵侯に封ぜられ、大司農に至つた人であるが、或時謝安が逵に向い「君達兄弟はどうしてそのように志も人生も違うのか」と問いしに対し、逵は「私はその憂に堪えませんが、

弟はその楽しみを改めないのです」といつて、論語を引いて答えた。戴逵にとつて、隠逸は正に無上の楽しみであつたのである。

同じく戴逵と関係のあつた人に、謝敷と龔玄之がある。謝敷は会稽の人で、その父祖については記されていない。彼は仏教を篤信し、太平山中に入つて十余年、高尚の名を得ていた。或夜、月が少微星（一名処士星という）を犯したことあり、占の結果、「処士が死す」ということであつた。当時戴逵は会稽の剡に隠逸して文才芸術に富み、謝敷よりも先んじて有名であつたので、戴が死ぬのではないかと案ぜられていたのに、謝敷が死んだので、会稽の人士は、戴が天象に応じなかつたのを嘲つたという。又郗恢（前述郗超の弟）が彼の心境を賞めた言葉が伝わつているから⑤、郗氏の一族が彼を後援していたものと思われる。次に龔玄之は武陵（湖南）の人で、父の登は長沙相・散騎常侍を歴任した。彼も学問芸術を愛し、戴逵と似た所があつたことは、孝武帝が同時に両人を徴した時の詔に「並に仁に依り芸に遊び、学は儒業を弘む」とあり、散騎常侍・国子博士となさんとしたが、共に就かなかつた。

次に何準は廬江（安徽）の人で、その女は穆帝の后であり、兄の充は宰相の位に至つた。彼は一切の徴聘を避けて布衣の身でいたが、而も高名は貴門の間に及んでいたから、兄から出仕をすすめられた時も、「わが第五の名（何充の第五弟の意）は、どうして驃騎（兄の充は時に驃騎将軍たり）に劣ることがあろうか」といつた。彼は仏教を崇信して日々経典を誦し、且つ塔廟を修営した。その卒するに当り、金紫光禄大夫を贈られ晋興県侯に封ぜられたが、その子は、父の素行高潔なるの故を以て辞退した。しかし子孫は皆高位に上つている⑥。

次に陶淡は太尉侃の孫で、その家には千金の産あり、僮客は百数十人も居た。しかし彼は一切家事を問わず、早くより仙道に没頭し、妻も娶らずただ一匹の白鹿を伴として、長沙の臨湘山中に廬を結び、近親の者も近づくことが出来なかつた。

以上阮裕より陶淡に至る東晋の貴族的隠逸につき、『晋書』隠逸伝及び『世説新語』棲逸篇の中から例を拾つて述べたが⑦、何れも自適主義に徹していることが見られる。そしてかかる風が如何に広く行われていたかを見る為に、更

に当時の最高貴族の一員たる王羲之・謝安等について述べてみよう。

王羲之[8]は宰相王導の従子として、当時の最高門閥に属し、早くより王導・殷浩・阮裕等の先達から推賞されていた（『世説新語』品藻篇・賞誉篇）。彼は経世の才にも乏しくなかつたことは、殷浩の北伐を戒むる文や、謝安に与うる書等を見るに、何れも戦略や内政を論じて時宜に適つている。しかし彼は早くより隠逸の志を有し、晩年に会稽内史として浙江を渡りし時、固く終焉の心を抱いていたことは、『蘭亭集序』についても見られる。彼が致仕したのは、王述との関係による。同じ王氏の中でも彼は瑯邪の王氏で、王述は太原の王氏であつた。彼は王述の人物を軽蔑していたが、王述が中央に立ち、会稽郡を検察するに当り、羲之はその下にあることを深く恥じ、遂に全く官を去つたのである。このことは陶淵明が督郵の視察に際し、「吾豈五斗米の為に腰を折り、拳々として郷里の小人に事えんや」[9]といつて封沢の令を辞したこととやや似ているが、羲之の場合は王述との間に個人的な感情があり、又門閥間の争があることは、彼の諸子が王述の子の旦之の権勢に及ばないことを歎いていることによつても分る。時に永和十一年（三五五年）で、彼はこれ以上王述と競うことが却つて家門を傷ける所以であることを恐れ、老子の止足の誡めを守ることを誓つて官を去つた。

致仕して後の羲之は全く自由の身となつた。王氏は代々五斗米道を奉じていたので、彼も道士許邁に従つて仙道を修め、諸名山を跋渉した。彼が謝万に与えた書を見ると、その隠逸の情が最もよく現われている。「古の世を辞する者は、或は髪を乱して偽り狂し、或は身を汚し跡を穢して苦しみを忍んだ。然るに今自分は坐ながらにして免れることを得、宿心を遂げることが出来たのである。それは真に幸というべく、天の賜であつて、天に違うのは不祥である」といい、諸子を率い弱孫を抱いて、自然の中に遊ぶことを喜んでいる。そこに描かれている生活は、「田をめぐり、地の利を視る」大土地所有者としての隠逸である。彼が最高門閥の人でありながら、著しく質素な生活に甘んじたことは認められるが、兎も角その隠逸が坐ながらにして逸れるものであり、自己の田園の中にありて隠逸そのものを楽しんでいることは否定出来ない。

王羲之が官を去りたる頃、謝安[10]はなお会稽上虞県に隱れ、徵召を聞きても出でず、心を事外に縱まにしていた。その棲逸は女妓をつれて遊肆し、最も貴族的なものであつた。しかしそれだけに純真で、朝令に從わざるを以て彈奏され、遂に禁錮に処せられようとしても動かなかつた。彼の弟の謝万は西中郎將となり、北伐の重鎮として顯貴の位にあつたが、しかも東山に隱れた謝安の高名には及ばなかつた（『世説』品操篇注引『中興書』）。しかしながら東晉の貴族でも、富はやはり官位と密接に結びついていた。如何に謝安の棲逸が豪奢であるといつても、布衣の身には限りがあつた。謝万をはじめ彼の兄弟の門が富貴に賑わつているのを見て、謝安の妻が彼に向い「大丈夫はやはりあのようになるべきではないでしようか」というと、安は鼻をおおうて「心配しなくとも富貴（臭腐と見る）を免れることが出来ないだろうよ」と答えた（『世説』排調篇）。後に謝万が失脚した為に、謝安は意を翻し、齢四十を超えて始めて桓温の征西司馬として出仕した（三六〇年）。それは謝安ほどの名門にとつては身を屈したことになるので、彼の名声は一時下落し、郝隆や高靈から揶揄されたことが見えている（『世説』排調篇）。これによつても、名門の士が棲逸していることが、如何に高い誇りを有していたかがわかる。西晉の張敏が「一介の士が身を顯わし名を成す所以は、栄啓期や漁父のように隱遁することだ[11]」といつているが、別に身を顯わす必要に逼られておらぬ東晉の貴族においては、真の意味において高尚の名を得ることが出来たのである。隱逸者が名声を得ることは、葛洪の所謂「真隱」――名を捨てて跡を残さないこと――と相反するように見えるけれども、勝れた人間が全々社会から認められないということは、その人にとつて堪えられないことであり、事実あり得ないことである。だから葛洪も知音を求め、せめて後世に認められることを願つている。葛洪が誡めているのは、名の為にすることである。若し名声が自己の価値に從つて自然についてくるものならば、勿論それは喜ぶべきことなのである。東晉の貴族にとつて、それが容易になされる境遇にあつたことは幸福であつた。この意味において東晉の隱逸が、それだけ自然にして純粋になつてきたということが出来る。

王羲之と謝安が会稽に棲逸したことは、当時の社会に大

きな反響を呼起したであろう。然らずとも会稽郡は佳山水を以て知られ、風流の士の巣窟であつた。会稽と都の建康（南京）との間には水路が通じており、土地の開発もすすみ、[12] 又この地方が呉王以来銅や海塩の利に富んでいたことは有名である。今まで本論で述べた中にも、会稽に棲逸した人々を多く挙げたが、その外にも王羲之や謝安の友で、孫統・孫綽・許詢・支遁等が居たことが著聞している。孫統は山水を酷愛して狂士といわれ、自ら求めて会稽鄞県の令となり、官に在りながらただ名勝を探ることにのみ耽つていた。孫綽はその弟で、初め会稽に隠れて遂初賦を作りしことは有名で、山水文学の濫觴とも見られている。[13] 許詢は高情遠致の人といわれているが、宮廷や貴門に出入し、その隠宅には常に贈遺が運ばれていた。彼等が如何に会稽の山水に優遊し、裕かな貴族的サロンの中で清談に興じたかは、『世説新語』の中に多くの逸話を残している。

又王羲之の諸子が父に倣つて会稽に住んだ中でも、殊に王徽之の風流については多く語られている。彼は桓温の参軍となり、後に又桓沖の参軍ともなつたが、自らの管轄する職務については全く無頓着で、その意味において在野の処士と異らなかつた（『世説』簡傲篇その他）。顕貴の職にある名士[14]が、自らの職務に拘泥しないということは魏晋に一般的のことであつたが、魏・西晋の頃までは保身の為にすることが多いのに対し、東晋人においては山野に自適する処士と通ずる所に特色があつた。王恭が「名士は必ずしも奇才を用いず、ただ常に俗事を避け、痛快に飲酒し、離騒を熟読すれば、それが立派な名士だ」（『世説』任誕篇）といつているのも、東晋的な考え方である。又隠逸の高士については王旦之が「高士というものは、悠然として物に拘束されない人のことである。しかるに沙門は俗外というけれども、俗人以上に教に束縛されて情性の自由を得ないから、高士とは云えない」（『世説』輕詆篇）、といつている如く、物に拘束されないことは名士と同様であつた。そして桓温が嘗て皇甫謐の『高士伝』を読み、於陵仲子が身を苦しめて不自然な生活をするのを見て嫌棄したとあるが（『世説』豪爽篇）、東晋人の憧れる高士は、そのような不自然なものではなかつた。謝玄が謝安に謂つた言葉に、「遊肆ということは別に高唱しなくとも、ただ坐したまま鼻を捻つてあたりを見廻せば、おのづから山沢の間に休息する思があるも

のだ」（『世説』容止篇）とある如く、坐ながらにして隠れることが、東晋人の理想であつた。

以上の貴族的な隠逸と趣きを異にし、貴族でありながら農民と交わり、自らも農耕に従つた人々がある。この場合の隠逸もやはり、その背景に貴族社会の身分的経済的な根拠があつて、自適主義を失わないことが見られる。以下翟湯・郭翻・劉驎之を挙げて述べてみよう。

翟湯は南陽の人であるが、尋陽に隠れていた。彼の家は漢の翟方進（『漢書』八四）の後である。彼の生活については「耕して後に食う」（『晋書』隠逸）とあるが、僮客も相当に有していた。康帝の建元初年に安西将軍庾翼が石虎を北征するに当り、大いに豪族所有の僮客を発して軍役に充てようとした。その時翟湯の隠逸人としての名徳を憚り、特に彼を除外することを命じた。しかるに翟湯は特別の処置を受けることを好まず、自らの所有する僕使を悉く郷吏に委し、郷吏がそれを拒むと、湯は調の限数に相当するだけの僕使を放免し、編戸して百姓となした。これによつて彼が、多くの土地と僮僕を有していたことがわかる。しかしそのことは、彼が隠逸人として「篤行純素、仁譲廉潔、不屑世事」ということと、矛盾するものではない。彼は人の贈遺を受けず、釜や庾（ユ）と雖も受取らず、嘗て始安太守の千宝が贈物を舟に載せて彼に届けしめたところ、彼はその代価を絹に易えて返還した。しかし彼の高尚の名は朝野に聞えていたので、宰相王導・征西将軍庾亮や康帝等が夫々熱心に徴辟したが、何れも固辞して就かなかつた。

次に郭翻は武昌の人、その伯父訥は広州刺史、父の察は安城太守で、二千石の家であつた。しかるに彼は臨川（江西）に家して躬耕し、「貧にして業なく」（『晋書』隠逸）、荒田を開墾しようとする時は、予め表題を立て、年を経ても所有主が無い時に始めてその土地を耕した。稲が熟した時に俄かに所有主が現われると、彼はその収穫を悉く与えて顧みず、県令が斡旋しても受取らなかつた。又或時車に乗つて遠く猟し、途中病者に逢い、その病者を自分の車で送つて、自らは徒歩で帰つてきた。彼は漁猟で得しものも、余分は人に与えて己れの名も告げなかつた。但し彼等の廉潔には極端な所があつた。或時彼が誤つて刀を水中に落したことあり、通りかかりの路人が水中に入つて刀を取出す

と、彼はその刀を路人に与えてしまつた。路人がそれを拒むと、彼は故意に刀を水中に棄てた。路人が再び水に入つて取出すと、彼は已むを得ずその刀を受取つて、代りに価を十倍にして路人に与えたという。「廉にして恵を受けず」ということが彼等の信条であつた。それは古来の逸民の風であり、求めず懼れず、世に詔らわないで生きてゆく為には、かかる廉潔も必要であつたのである。この郭翻にも後援者があつた。庾亮とその弟の庾翼（安西将軍、その女は成帝の后）が、各々彼を起たしめようとして薦めたが、何れも応じなかつた。

次に劉驎之（字は遺民）は南陽の人で、光禄大夫劉耽の一族である。彼は陽岐（江西省萍鄉県の東）に居り農民と交わり、たとい厮役者でもその家に結婚や葬送のことがあれば自ら出かけた。彼の家から百余里の所に孤独な老婆が居り、将に死せんとして私かに彼に埋葬されることを期していた。それを聞いて彼は、自ら行つて後事をなし遂げた。陽岐に永く住んで村人と衣食を共にし、己れの乏しき時も彼等から与えられた。彼の家は官道の近くにあつたので、士君子も屢〻立寄つたが、彼は自ら労働してもてなし、その為に謝礼を取ることはなかつた。車騎将軍桓沖が苻堅の軍に備える為に彼を長史に請い、わざわざ訪ねて行くと、彼は桑の樹上で働いていた。やがて座に通されるや、彼の父が命じて、彼に濁酒と塩菜を以て給仕せしめた。桓沖が恐縮して部下の者に代らしめようとすると、父は「これが野人の意である」といつて肯んじなかつた（『世説』棲逸篇）。これをみても身分ある隠逸人が、自ら労働に従事している場面が知られる。桓沖は後に再び人を遣わし、多くの贈物を載せて彼を迎えしめた。彼は召されて行く途中で、その贈物を悉く縁道の貧者に与え、いよいよ桓沖に会うや、已れの無用を陳べて引返してしまつた。彼は中央の顕官にも広く知られていたので、嘗て謝玄が彼に逢い、その名を聞いて驚いた話が載せられている（『世説』任誕篇）。彼は「質素にして虚退寡欲、山沢を好みて志は遁逸に存す」（『世説』棲逸篇註引、郭奈『晋記』）といわれているように真正の隠逸人であり、農民と共に躬耕しながら、而も楽しんでこの道を選んだものである。

この劉遺民と周続之と共に尋陽の三隠といわれている陶淵明は、やはり農民の中に隠れ、心から在野の生活を愛し、

自然にして高尚なること、この人の右に出づるものはない。しかしこの人はあまりにも有名で、研究も多くあるから、ここでは省略する。

以上述べた人々はその生活態度が古来の逸民に似た所があるが、彼等もやはり貴族社会を根柢として立ち、自ら好んでこの生活に入つていることは、やはり東晋的な特色を失わない。ただ彼等が貴族の出身でありながら庶民と共に生活したことは、古くから隠逸の中に伝わる自然的平等観が作用しておるものであり、この意味において隠逸は、最も高踏的な面と又最も庶民的な面とを、共に併せ有していたことを知るのである。それは隠逸の理念ともいうべき老荘思想の道が、最も幽玄にして、而も最も低きものに同じてゆくものであることと関連する。

東晋の隠逸に異彩を放つものに、仏教僧の存在がある。『世説』棲逸篇には康僧淵が一人挙げられているが、その他にも康僧淵に類する者は数多くあつた。

康僧淵は胡人で、その出自は未詳であるが、東晋の初に江を渡つて南し、王導や殷浩等と交わつていた（『世説』文学篇）。後に豫章（『高僧傳』には豫章山とあり）にあつて城郭を去ること数十里の所に精舎を立て、連嶺に添い長川をめぐらし、軒庭には芳林がつらなり、堂宇の下には清流が激していた。東晋の大官達も多く彼の居を訪問したが、嘗て庾亮が往き、その風流比するにものなく、その間にあつて彼は悠々と研究講論し、怡然として自得せる様を見て讃歎した。これにより彼の名声は益々上り、それに堪えられなくなつたので、彼は遂にその居をすてて、都に出たという（棲逸篇。『高僧伝』巻四によれば「のち寺に卒す」とあり）。

中国仏教は、東晋時代に道安や羅什・僧肇・慧遠の如き真摯な僧が出で、哲理の研究と宗教的情熱とに献身し、その門弟は次第に拡がつて、南北朝より隋唐に至り偉大な仏教王国を建設した。しかしあまり戒律を重んじ、乃至は非現実的な空観論理に傾くことは、中国において永久に栄える所以ではなかつた。右の方向とはやや異るが、仏教が中国の知識人の心に入る当初には、いわゆる清談仏教といわれる一時期があつて、東晋時代の康僧淵や支遁等がそれを代表していた。彼等は貴族的な隠逸人と同様、山水に自適して清談を娯しみ、その哲理は著しく老荘思想と融合して

いた。[15] この清談仏教は東晋時代を過ぎると次第に影を没してしまつたが、後に中国仏教が禅による居士的な仏教に広く分散して行つた時、再び清談仏教に見るような自適主義が蘇つてきた。その意味において清談仏教は、最も中国の知識人にふさわしいものであつた。

なお東晋時代には、隠逸が単に個人的に行われるばかりでなく、往々にして一族間に拡がり、父子代々にわたるものも見られる。上来見てきた中に就いても、翟湯はその子荘、荘の子嬌、嬌の子法賜に至るまで、隠逸を以て継承した。孫統・孫綽の兄弟が何れも一時隠逸したばかりでなく、彼等の祖父孫楚も亦「漱石枕流」の語を残した人で、隠逸に心を引かれていた。戴逵の長子勃、勃の弟顒も共に父の風あり、一門皆剡県にありて住し、その高風は晋宋の間に聞えていた。阮裕が阮籍の族弟であり、裕の兄放も曠達の名あり、この一族には老荘思想による処士的な気風が流れていたようである。その他戴逵が范宣に師事して共に隠逸の風がある如き（両人とも『世説』棲逸篇に載る）、師弟間に伝わるものも少くない。かかる傾向は南北朝に至つても同様であつた。

むすび

西晋時代の隠逸には、なお伝統的な古来の逸民の風が強く遺つており、逃避的であり、従つて耐乏的な面が見られる。東晋時代になると、隠逸の逃避性が表面から薄らぎ、自己の田園の中に家族と共に坐ながらにして隠れ、その生活は貴族社会によつて保証され、その上努めずして高尚の令名を有し、甚だ楽しむべきものとなつた。且つ東晋の依つていた江南の山水は、老荘の自然の思想と結びついて、一層彼等の自適主義を助長した。蓋し東晋の貴族社会が固定し来り、国家権力がその中に分散するに及んで、貴族の構成員は自己の身分的経済的根拠に依存し、自己の封鎖性の内に安逸することから考えると、東晋の隠逸は事実上より深い逃避に入つたものというべきであろう。

西晋より東晋に移る過渡的なものとして挙げた葛洪において、隠逸者が無名と貧困に耐えるものとして描かれているのは古い伝統に属するものであるが、隠逸者は万物の大本としての道を求めるものであるが故に、選ばれた賢者が自ら志望してこの生活に入るべきものであるとしている点

は、東晋的な隠逸の方向を示している。なお東晋の隠逸人の中には、貴族の出でありながら自ら耕作して農民と共に暮した人々がある。これは隠逸の中に最も高踏的な面と、同時に庶民的な面とが含まれているものとして興味がある。

註

① 時代が東晋時代にわたるものとしては、敦煌地方で索襲・宋繊・郭瑀があり、又、天水（甘粛）の楊軻、上谷（河北）の公孫鳳、中山（河北）の張忠、襄平（満洲）の公孫永、北海（山東）の石垣、略陽（甘粛）の郭荷、酒泉（甘粛）の祈嘉、蜀（四川）の譙秀と龔壮等があり、何れも五胡十六国（その中甘粛、敦煌地方は漢人張氏の前涼国に属す）の下にありて隠逸した人々である。彼等については、特に乱を避けたことは記されておらず、多くは学問に専念して世事を去てた人々であり、五胡民族の君主達も彼等文化人を遇すること中国の君主に劣らぬものがあるが、隠逸する人々の性格は権力や寵遇に屈することが出来なかつたのである。その生活は例外もあるが一般に耐乏的なものが多く、例えば公孫鳳は常に土牀の上に寝ね、夏は食物を器中に混じ、腐敗せしめて然る後に食つた。慕容暐から徴されて鄴都に行つても、その生活様式を易えなかつた。右の人々については政治上の関係から別に考究する必要があり、今は省略する。

② 中国の隠逸の伝統に関しては、別の論証を要するわけであるが、今は『後漢書』逸民伝中の人々や、乃至は古来隠逸の例としてよく引かれる栄啓期（『列子』天瑞篇）・漁父（『荘子』漁父篇）等の生活態度を予想していることを指摘するに止めておく。

③ 『論語』に次の如く見えている。「危邦不入、乱邦不居、天下有道則見、無道則隠」（泰伯）。「道不行、乗桴浮於海」（公冶長）。「挙逸民、天下之民帰心焉」（堯曰）。「逸民、伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下恵・少連、（下略）」（微子）。

④ 中国山水画の瀟洒も、彼において見られる（拙稿『六朝の自然観』美術史3参照）。

⑤ 郗恢は謝敷と仲が善く、常に称して「謝虔緒（敷の字）は識見が人にすぐれているわけではないけれども、心を累らわすような処はすべてなくなつている」といつた（『世説』棲逸篇）。

⑥ 何準の子孫のことは、『晋書』九三外戚何準伝に見ゆ。

⑦ 阮裕・何準は『世説』棲逸篇に、龔玄之・陶淡は『晋書』隠逸伝に、孟陋・戴逵・謝敷のことは右の両書の何れにも見えている。

⑧ 『晋書』八十王羲之伝

⑨ 『晋書』隠逸陶淵明伝

⑩ 『晋書』七十九謝安伝

⑪ 『世説』排調篇注引『張敏集』

⑫ 岡崎文夫『魏晋南北朝通史』五七一頁。

⑬ 孫統・孫綽の伝は、『晋書』五六孫楚伝に附す。

⑭ 名士については『世説』文学篇注に、袁宏の『名士伝』のことが見えている。

⑮ 道安や僧肇・慧遠の仏教も、老荘思想と融合していたことは同様である。ただ道安等が無心による普遍的な道を追究して空観に近づこうとしたのに対し、支遁等は自己の内にある自然に随順することにより、荘子風の自適主義に傾いた。

Historical Ideas of Thucycides

by

Zuien Hara

According to Thucydides, man makes history, a state is a historical individual, and the *Staatsräson* works irrationally. Concerning these themes, he as a historian always bore in mind to describe states as they actually were. However, it is also true that he did not fail at any moment to suggest what the state should be. Therewith he anteceded the philosophical researches in the fourth century B. C. in Athens.

Hermit Life (*In-itsu* 隱逸) of Tung Chin (東晋) Period

by

Yoshizane Murakami

In-itsu (隱逸) is a kind of seclusion, whose characteristics vary according to the ages. At the earliest times in China, *in-itsu* meant to retire to a remote place away from the governmental authority and to lead a hard life in producing foods and housing by oneself. This traditional *in-itsu* was prevalent as late as the Hsi Chin (西晋) period. At the Tung Chin (東晋) period, however, it came to be a solitary life in one's own land, provided with enjoyable facilities. This happened because of the consolidation of the aristocratic society, and did not always mean being less seclusive. Then, learning Taoism deeply, hermits of this age were respected among the nobles. Nevertheless they had much of the commoner as well as the aristocrat in the way of living.

A Study on Bandobon (坂東本) of Kyogyoshinsho (教行信證)

by

Toshihide Akamatsu

Resent studies of Kyogyoshinsho by Shinran (親鸞) have been